

ダイコン（冬まき栽培）



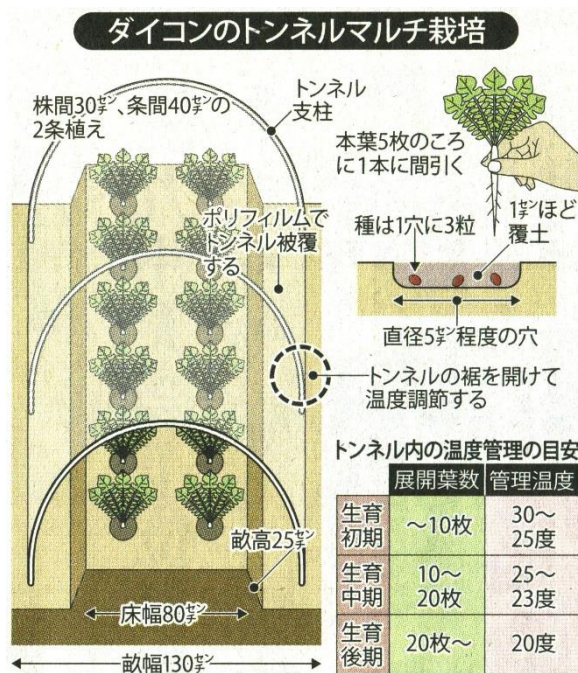
高温でとう立ち抑制

— 田中 義弘

ダイコンの原産地は、地中海東岸地方やインド、中国などとされ、日本への渡来は奈良時代といわれています。その後、各地で多くの地方品種が分化しました。その代表的なものとして、ゴボウのように細長い「守口大根」と世界最大の「桜島大根」が有名です。これらのような世界に類を見ない多様な品種を生み出した農家の方々の努力には驚かされます。

一方で、店頭によく並んでいるダイコンは、葉に近い部分が淡緑色をしたものが多く、これらは総称して「青首大根」と呼ばれ、そろいの良いF1（一代交配）品種がほとんどです。

大根の成分は、根には消化を助けるジアスターゼが含まれ、葉にはビタミンAやミネラルが多く含まれています。今回は、根重1kg程度を目標に収穫する暖地に適した冬まきのトンネルマルチ栽培を紹介します。



ダイコンは低温にあうと花芽ができ、その後とう立ちします。一方、20度以上の高温は低温により花芽ができる状態（春化）を打ち消す作用（脱春化）があります。冬まきトンネルマルチ栽培は、とう立ちの遅い品種を利用し、生育前半にトンネル内を高温管理して、とう立ちを抑制することがポイントになります。品種選定とトンネル温度管理に気をつけて冬まきダイコンにチャレンジしてみましょう。

品種は「春風太」や「つや風」など、とう立ちの遅い（晩抽性）品種を必ず利用します。種まき適期は11月～1月です。本ぼには1平方メートル当たり苦土石灰100g、堆肥2kg、化学肥料100g（チッ素、リン酸、カリ成分15%の場合）を目安とします。なお、堆肥は1か月以上前に施し、畑は30cm以上深く耕しましょう。

畝幅130cm、床幅80cm、畝高25cmに畝立て後、透明ポリでマルチします。その後、株間30cm、条間40cmの2条植えになるように直径5cm程度の穴を開けます。1穴に3粒種まきし、1cmほど覆土して軽く鎮圧します。直ちにポリフィルムでトンネル被覆し、本葉5枚のころに1本に間引きします。

トンネルの温度管理の目安は、生育初期は脱春化作用を狙い、昼間25～30度と高温で管理し、生育後半は根の肥大適温である20度を目安に換気します。風通しが悪いと病害発生の原因になるので注意しましょう。

収穫期は2～4月です。根径7cm、根重1kg程度になったら収穫しましょう。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室主任研究員）

平成26年11月13日（木）／南日本新聞